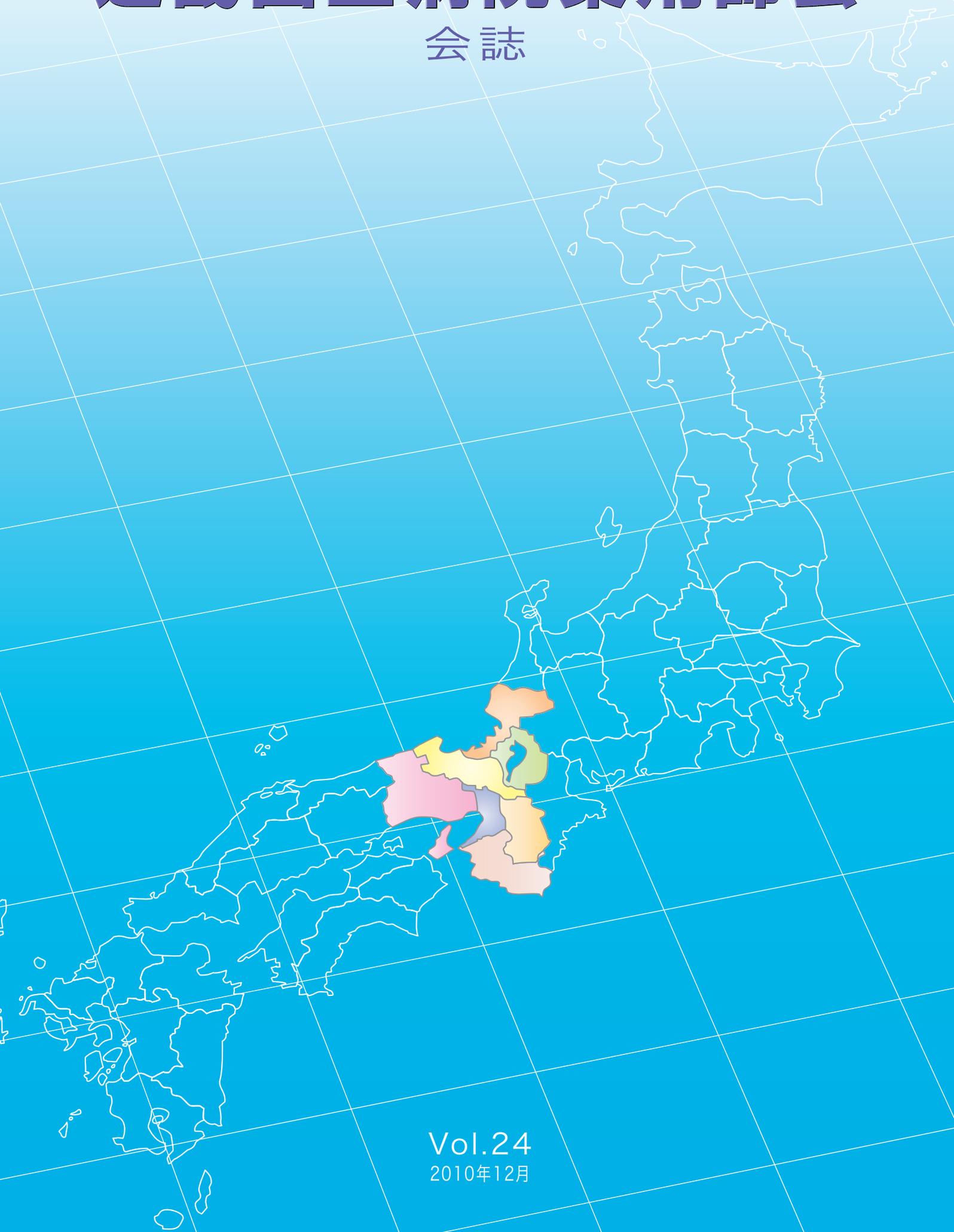


近畿国立病院薬剤師会

会誌



Vol.24
2010年12月

目 次

提言	2
	あわら病院 谷 克也
薬剤科紹介 兵庫中央病院	3
	兵庫中央病院 松村 なるみ
業務検討委員会主催講演会報告	6
	近畿中央胸部疾患センター 宮部 貴識
第 20 回日本医療薬学会年会に参加して	7
	刀根山病院 廣畑 和弘
京都医療センター緩和ケアチームにおける薬剤師の活動	9
	京都医療センター 古川 順章
編集後記	10

提 言

～～「チームワークとリーダーシップ」～～

あわら病院 薬剤科長 谷 克也

2010年の8月、南米チリの鉱山で、落盤によって地下の坑道がふさがれるという事故があり、地中で作業をしていた作業員33人が2カ月以上にわたり、地下約700メートルの場所に閉じこめられました。救出には国の威信がかかり、世界が注視するなか、10月13日、カプセルを使って作業員を救い出す前例のない救出作戦が行われ、約1日半で、全員無事救出されました。閉じ込められた作業員、救出作業を急ぐ部隊、見守る家族たち。みんなが極限状態にありながら、統制のとれた行動はまさにチームワークのたまものであり、そのチームのリーダー的存在も大変重要であったように感じました。統率力を発揮したリーダーの存在と、信じて耐えたチームワークが、救出現場と地下700メートルの距離が一体となるあの感動的な光景をつくりあげたのではないのでしょうか。

チームワークとはその名のとおり、「二人以上の人たちが、チームの目的を達成するために一緒にワークする」ことです。良いチームワークがあれば、課題と取り組んでいる最中にどんなに苦しくても、仲間の仕事を調整し、助け合いながら自分の役割を全力で担うことができ、そして、難題を乗り越え、期待を超える成果を出すことも稀ではありません。そのときのチームは、全員があたかも一人であるかのように、一体となります。そして、チームが目的を達成したときの仲間への感謝の気持ちや、自分がまたひとつ成長したという満足感に、すがすがしい爽やかさを感じ、苦しくてもまたこのチームで仕事をしたいと思うことです。人は集団の生き物です。仲間から話を聞いて、新しい発見をしたりすることもあり、誰かに話しをして、突然問題に気づくこともあります。良いチームワークは、私たちを成長させてくれます。さらに、プロジェクトが成功するためには、まずリーダーとメンバーの間にいいチームワークが成立する必要があります。そしてリーダーには、プロジェクトの方針を部下に分かりやすく説明する、先頭に立ってプロジェクトを引っ張る、部下とともに汗をかく、など多くのことが要求されます。良いチームワークが創造できる管理者なら、現在の数倍の利益を生み出すことができるでしょう。

このことは病院の活動においても、他職種間とのチームワークを形成し、様々な診療科や職種などの専門性を統合し、医療の質を向上させて総合的な医療サービスを提供できるものと信じています。国立病院機構の職員の人として使命を全うしていきたいと考えています。

薬剤科紹介



兵庫中央病院

【環境】

当院のある三田市は、兵庫県の南東部に位置しています。四方を六甲山系などの山々に囲まれ、市域の南北にわたり武庫川が貫流する豊かな自然は、三田牛、三田米、また丹波黒大豆など、多くの恵みをもたらしています。市南部には麒麟ビール神戸工場があり、ビール缶を模した「ラガーバス」が朝から見学者を運ぶ光景が見られます。ビールと言えば三田市は、近代化学の祖として名高く、日本で初めてビールを醸造した川本幸民の出生地でもあります。平成 22 年は幸民の生誕 200 年にあたり、三田市では、幸民を顕彰するさまざまな催しが企画されました。

【概要】

当院は、神経・筋難病、筋ジストロフィー、重症心身障害や結核・呼吸器疾患に関する専門医療を行う兵庫県の拠点病院として、県内外から多くの患者を受け入れています。平成 21 年 3 月には、新病棟の建て替え整備が完了し、広い敷地に分散していた病棟が一元集約されました。また本年 9 月からオーダーリングシステムが導入され、業務の効率化が図られています。

標榜診療科は 14 科、医療法承認病床数 550 床（結核、重心含む）、1 日平均外来患者数 191 人です。

【薬剤科紹介】

薬剤科スタッフは、薬剤科長、副薬剤科長、主任薬剤師 3 名、常勤薬剤師 6 名の計 11 名です（うち 1 名育休中）。今年度の薬剤科目標として、①薬剤管理指導業務の質向上及び指導件数増を図る②医薬品情報の管理を徹底し、医薬品適正使用・安全管理を充実する③チーム医療を推進し、安全で質の高い医療を提供する④薬学 6 年制実習の受け入れ及び積極的な学会発表を推進する⑤後発医薬品の品質、安全性、安定供給などの情報を収集し、使用促進を図る、を掲げており、薬剤科一丸となって業務に全力で取り組んでいます。



・調剤

薬剤科では、オーダーリングシステム導入に先んじて、本年3月に新しい部門システムが導入されました。全自動錠剤分包機には、自動半錠切断機能（一部薬品）があり、調剤スピードが向上しました。また、注射剤自動払い出しシステムを導入し、従来の処方毎払い出しを1日分払い出しに変更することで、病棟の薬剤整理に要する業務量の減少、および薬剤の誤投与が減少し、医療安全に大きく寄与しています。当院は重度心身障害や神経難病の患者を多く抱えているため、従来から散薬調剤・錠剤粉砕が、調剤業務全体の中で多くの割合を占めていましたが、全病棟で簡易懸濁法を導入することにより、業務改善が可能となりました。

・チーム医療への参画

薬剤科では、チーム医療に積極的に参画しています。ICT、NSTのラウンド、カンファレンスに参加し、薬剤師ならではの視点で提言を行っています。外来患者を対象とした糖尿病教室・骨粗鬆症教室および循環器教室には、講師として定期的に参加しています。また、当院の糖尿病患者会の活動には中心メンバーとして企画にも関与し、欠かせない存在となっています。

・薬学部6年制実習受け入れ

本年第2期（9月）より、2名の実務実習指導薬剤師が中心となって、薬学部6年制実習の学生を受け入れています。

・後発医薬品

当院採用の後発医薬品は、全採用品目の21%を占めています（平成22年11月現在）。今後も後発医薬品の採用を積極的に進めていきます。

・持参薬管理

本年10月より、すべての入院患者に対する入院時持参薬チェックを開始しました。入院受付時の待ち時間を利用し、持参薬の鑑別・副作用歴の聴取を行い、持参薬鑑別書を作成します。オーダーリングシステム上にこの持参薬鑑別書、面談結果を即時掲載することで、円滑に処方がなされるようになりました。また入院時に面談を行うことで、中止が必要な薬剤、健康食品などを抽出することができ、医療安全にも大きく貢献しています。

・がん化学療法

平成18年4月から、化学療法委員会にてレジメン登録されたすべての抗がん剤および調製が必要な抗リウマチ薬の外来・入院化学療法について、薬剤科にて無菌調製を行っています。

本年は部門システム導入から始まり、オーダーリングシステム運用開始、そして薬学部6年制実習生の受け入れと、大きな変化の波を次々と受け入れた年でした。進化する薬剤師業務の波にも溺れてしまわぬよう、常にスキルアップを心掛け、患者さんと医療スタッフの信頼を得られるよう日々努力しています。



(文責 松村 なるみ)
次回は兵庫青野原病院

業務検討委員会主催講演会報告

近畿中央胸部疾患センター 宮部 貴識

日 時 平成22年10月23日(土) 14:30～16:45

場 所 新梅田シティ梅田スカイビル西棟22階会議室

参加人数 143名

会員講演

演題「各施設におけるNST業務について」

演者 国立病院機構 姫路医療センター 寺川 伸江先生

国立病院機構 大阪医療センター 島田 志美先生

座長 国立病院機構 大阪医療センター 河合 実先生

特別講演

演題「医療安全に果たす薬剤師の役割

－内服処方せんの記載の在り方に関する検討報告を踏まえて－」

演者 国立病院機構 大阪医療センター院長 楠岡 英雄先生

座長 国立病院機構 姫路医療センター 小林 勝昭先生

近畿国立病院薬剤師会業務検討委員会主催の講演会が会員講演と特別講演の2部構成で開催された。

会員講演では、各施設におけるNST業務の取り組みについての講演があった。

特別講演においては、医療安全に果たす薬剤師の役割について、これまでの薬剤師の役割の変化と、今後の役割とされるチーム医療への参画、医療安全への貢献について多岐にわたる内容をご講演頂いた。医療安全への貢献について、薬剤の専門家である薬剤師が主体的に薬物療法に参加することが医療安全の確保につながる事、また、医薬品に関連するインシデント・アクシデントを医療事故等の事例とともに紹介頂き、内服薬処方せんの記載方法の標準化に向けた今後の内服薬の処方せん記載の標準案、標準化への短期および長期的な方策について最新情報も含めてご講演頂いた。

第 20 回日本医療薬学会年会に参加して

刀根山病院 廣畑 和弘

平成 22 年 11 月 13 日（土）～14 日（日）に、千葉市の幕張メッセ（国際会議場、展示ホール）で第 20 回日本医療薬学会年会が開催されました。日本医療薬学会は、病院薬剤師が主な構成メンバーで、近畿国立病院薬剤師会の多くの先生方も本会に入会しており、現在 8,000 名を超える会員を持っています。日本医療薬学会が開催する例会には年会と地方会があり、年会は 1 年間の研究成果を発表する場として毎年この時期に開催され、年々盛況となっています。今回、私は年会に参加する機会を得たので報告させていただきます。

今回のメインテーマは「臨床から学び臨床へと還元する医療薬学」で、医療現場と連携した臨床研究の推進の意義についての検討が行われました。実際、大学と薬剤科との共同発表も数多くみられました。シンポジウムには多様なテーマが設定され、参加者の興味、経験、専門領域により会場を選択でき、どの会場も立ち見が出る盛況でした。特に、がん薬物治療における薬剤師の役割については、集中的に時間が割かれていました。

ポスターセッション会場は、全てのポスターと企業展示が同時に展示可能な巨大空間で、そのスケールの大きさに圧倒されつつ会場にはいりました。さすがに首都圏での学会だけあって発表数も多く、かつハイレベルなものが揃っており、一通りすべてのポスターを見て回るだけで約 2 時間程度かかりました。本年は、薬学教育 6 年制のスタートから 5 年が経過し、また実務実習の実施初年度でもあり、新しい教育と評価方法についての発表が多くみられました。製薬企業や医療機器メーカーのブースも充実しており、特に注射薬ピッキングマシンや調剤関連機器は、最新機種のパフォーマンスを見ることができ非常に有意義でした。

薬剤科業務はここ数年で大きく変わり、病院薬剤師の医療への貢献がいかになされたのかを、目に見える成果として示す事が求められています。今回、私はこの学会に参加して、

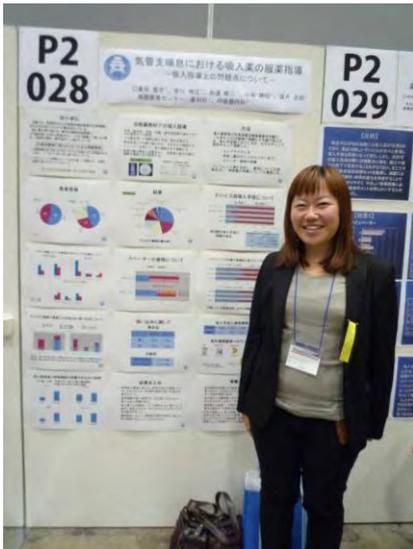


「今の薬剤師」が何を模索しているのかが、とてもよくわかりました。医療現場で、「チーム医療」の一員として薬剤師の存在を明確に証明するための努力の汗が、発表という結晶に結びついています。そして、数多くの発表テーマは、各人が直面している多彩な仕事の裏返しでもあります。

ポスターセッション・企業展示会場（幕張メッセ）

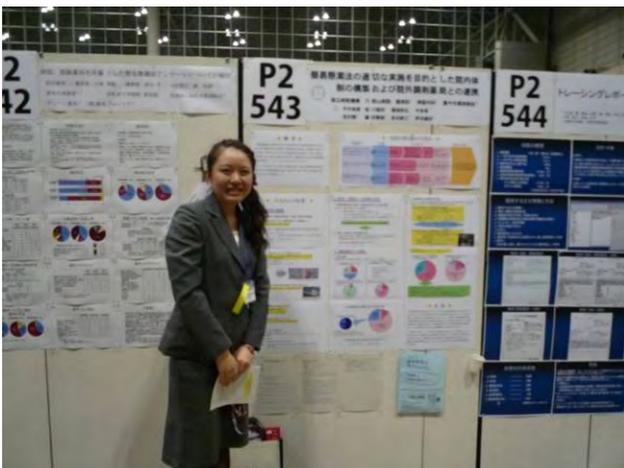
近畿国立病院薬剤師会の会員の発表も数多くあり心強く感じました。また、全国の国立病院の仲間とも出会い議論する事もでき、楽しい時間を過ごす事ができました。

年会は、来年は神戸市の神戸国際会議場で開催されます。学会での発表に興味ある先生も多いと思います。また、発表はしなくても、是非、ネタ探しに学会に参加してみてください。日常の問題点の解決へのヒントが得られるはずです。



姫路医療センター 壺阪 直子 先生

「気管支ぜんそくにおける吸入薬の服薬指導～吸入指導上の問題点について～」



刀根山病院 竹中 裕美 先生

「簡易懸濁法の適切な実施を目的とした院内体制の構築および院外調剤薬局との連携」

京都医療センター緩和ケアチームにおける薬剤師の活動

京都医療センター 古川 順章

近年チーム医療において薬剤師の存在意義が高く評価されており、緩和医療においてもその専門性を活かした活躍が期待されている。

当院緩和ケアチームは2006年6月にがん対策基本法が成立すると同時に発足し、現在緩和ケアチームメンバーは20名を越える多職種（医師、薬剤師、看護師、栄養士、カウンセラー、音楽療法士など）から構成されており、当薬剤科からは3名の薬剤師が緩和医療に携わっている。2011年1月に近畿ブロックの国立病院機構では初となる緩和ケア病棟が開設され、緩和ケアにおける薬剤師の専門性をさらに発揮できるのではないかと考えている。

今回、当院緩和ケアチーム薬剤師の現在の活動状況と新設される緩和ケア病棟について紹介する。

現在の緩和ケアチーム薬剤師の活動は大きく分けて、

①薬物療法のリスクマネジメントチェック、②医薬品情報の収集・提供、③緩和薬物療法の教育・標準化、④一般市民に対して、緩和ケアの正しい知識を持つことを目的とした普及・啓発などである。

薬物療法のリスクマネジメントチェック、医薬品情報の収集・提供は、薬剤師として行う当然の責務である。緩和ケアチーム及び病棟スタッフとの情報共有を図り、患者個々の状況を把握し薬剤の効果と副作用の評価を行うことで、患者が最適な薬物治療を受けることが出来るよう寄与している。

つぎに緩和薬物療法の教育・標準化に関しては、院内薬剤師を対象に毎月1回緩和薬物療法の研修会を開催し、研修会の最後に学習した内容や知っておくべき知識に関する確認試験を行うことでスキルアップを図っている。また電子カルテを利用して、緩和ケアの経験の差に関係なく効率的にアセスメントできる支援ツールを作成し、緩和薬物療法における服薬指導の標準化を図っている。院外の医療従事者に対しては、PEACEプロジェクト「全てのがん診療に携わる医師のための緩和ケア研修会」にファシリテーターとして参加し、地域緩和ケアの普及に努めている。

また一般市民に向けては、緩和ケア及びオピオイドに対する誤解や偏見を解いて正しい知識を得てもらう目的で、院内主催の「がん市民公開講座」にて講演を行うなど緩和ケアの普及・啓発を図り、参加者から好評を得ている。

今後の展望として緩和ケア病棟が開設すると、終末期の患者を迎えるケースが増えるため、苦痛緩和のための鎮静や終末期の輸液管理など、従来の薬剤師の枠を越えた活動も必要になると予想される。

緩和ケア病棟は全20室の個室で構成され、家族控え室、足湯サロン、祈りの部屋などを配し、終末期を迎える患者と家族のニーズを満たせるよう考慮した設計となっている。また病室内の配色はカラーコーディネーターが手がけて、落ち着いた雰囲気を出すなど細やかな配慮もされている。このようにハードの面で充実した病棟であり、緩和ケアに対する認識と期待の表れと感じている。今後は患者や家族が最も期待する「充実した医療を提供すること」を念頭に置き、薬剤師として貢献できるよう日々研鑽したいと考える。

編集後記

★年末恒例第一弾：2010年の新語・流行語大賞が発表されました。大賞は「ゲゲゲの～」に決定しました。ちなみにゲゲゲとは、漫画家の水木しげるさんが、子供のころ自分のことを「しげる」とうまく言えずに「ゲゲ」と言っていたことから、ゲを1つ足して「ゲゲゲの～」となったといわれています。つまり、ゲゲゲの鬼太郎は「しげるの鬼太郎」。ゲゲゲの女房は「しげるの女房」という意味のようです。

★年末恒例第二弾：2010年の今年の漢字には「暑」が選ばれました。夏の記録的な「猛暑」、地球温暖化に警鐘を鳴らした「酷暑」、地中の「暑い」環境から生還したチリ鉱山のトンネル落盤事故、大気圏突入による「暑さ」に耐え、無事帰還したはやぶさなどなど、「暑い」一年でした。

★年末恒例第三弾：2010年の読者が選ぶ「重大ニュース」（読売新聞）が発表されました。それによると、国内では「尖閣問題」「ノーベル化学賞」「口蹄疫」、海外では「チリ落盤事故」「北朝鮮の砲撃」「上海万博」となったそうです。医療関係の話題は残念ながら上位に入って無かったようです。

★年末恒例第四弾：2010年のベストセラーが発表されました。マネジメントのやさしい解説本である「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」（岩崎夏海、ダイヤモンド社）になりました。現在までに180万部以上売れているそうです。薬剤師にも必要なマネジメント術が学べるかも？

★いろいろな意味で「暑い」一年が終わろうとしています。来年がどんな年になるかは誰も知る由はありませんが、ただ言えることは、どんな年が押し寄せてきても、それを乗り切ることができる万全な体調にしておくことが大切だということです。会員の先生方も健康第一でお過ごしください。今年最後の会誌をお届けします。科長提言、薬剤科紹介、学会報告、専門薬剤師など充実した内容となっています。どうぞ最後まで御熟読ください。

近畿国立病院薬剤師会会誌

第二十四号 平成22年12月発行

発行元 近畿国立病院薬剤師会事務局

大阪市中央区法円坂2-1-14

(独立行政法人国立病院機構大阪医療センター薬剤科内)

発行人 会長 小森 勝也 (大阪医療)

編集 広報担当理事 廣畑 和弘 (刀根山)

広報委員

石塚 正行 (大阪南)

中西 彩子 (大阪南医療)

本田 富得 (神戸医療)

奥田 直之 (大阪医療)

宮部 貴識 (近畿中央)

東 さやか (大阪医療)

朴井 三矢 (京都医療)

玉田 太志 (刀根山)

近畿国立病院薬剤師会ホームページ <http://www.kinki-snhp.jp/>